日中友好新聞　京都府連版

第３３８号

日中友好協会京都府連合会

〒602-8026 京都市上京区新町通丸太町上ル　機関紙会館ビル３０２号
TEL＆FAX　075-256-2764　http://www.nichukyoto.gr.jp　info@nichukyoto.gr.jp

国際平和ミュージアムで第四四回「平和のための京都の戦争展」開催

展示・文化の催しに二千人が来館

第四四回「平和のための京都の戦争展」が五年ぶりに立命館大学国際平和ミュージアムを主会場に七月二九日から八月三日まで開催されました。六日間で二千人が戦争展の各プログラムを参観しました。

平和ミュージアムの君島東彦館長は開会セレモニーで挨拶し、「京都市民による戦争展と、立命館の教学理念である『平和と民主主義』を父・母として誕生したミュージアムに「平和のための京都の戦争展」が帰ってきたことは本当に喜ばしいと述べました。

展示は十六団体が参加しました。初めて参加した「戦争プロパガンダ研究会」の十五年戦争期の写真グラフや戦争ポスターには多くの人が熱心に見入っていました。また祝園弾薬庫増設問題を考える展示や、沖縄南西諸島のミサイル基地の現状を紹介した展示にも注目が集まりました。（二面につづく）

京都府連は、昨年に引き続き、重慶大爆撃の展示をしました。今年は、重慶の住民側からみた被害の側面を重視した展示です。

1941年6月5日に大勢の人が防空壕に殺到し窒息死した「6.5事件」の写真、爆撃で幼い時に両親や家族を亡くしたサバイバーの証言や、消防士や人命救助、郭沫若や長谷川テルの抗日宣伝も紹介しました。6.5事件の被害の写真に、「知らなかった」とショックを隠せない様子の参観者もいらっしゃいました。「重慶大爆撃を語り継ぐ会」の活動の写真も紹介しました。

重慶の被害者や支援者に展示の模様を伝えたところ、とても喜んでくださいました。

（西田）

９・１８柳条湖事件の日を忘れず、日中不再戦を誓う碑前集会

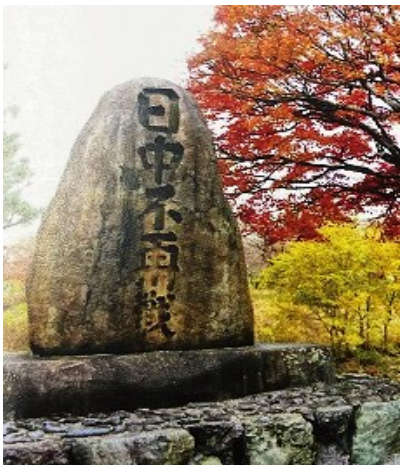
嵐山「日中不再戦」碑前集会

９月23日（月・休）11:00～12:00

嵐山・不再戦碑前

大西晶允師（清水寺）がお話をされます。

どなたでもお気軽にお越しください！



碑前集会のあと、花の家で懇親会があります。

※花の家の懇親会にご参加ご希望の方は、府連までご一報ください。参加費は3千円です。

文化企画はミュージアム内の二つのセミナー室だけではなく、末川会館の教室や会議室も使用して参加団体の催しが繰り広げられました。講演会では、戦争プロパガンダ研究会は河田隆史氏による「戦争プロパガンダと大衆操作」、日本史研究会のミニシンポ「戦跡の戦後史と『継承という断絶』」（福間良明氏）、平和友の会の「食と戦争――ウクライナとパレスチナをつなぐもの」（藤原辰史氏）などが行われました。生々しい映像を使って戦争の現場をレポートした西谷文和氏の「紛争地から見た憲法９条―ガザ・ウクライナ・アフガンを取材して」（戦争展実行委員会）にも多くの聴衆が集まりました。

日中友好協会京都府連は戦争展の盛り上げに大きな役割を果たしました。「特別企画講演会」として行われた駒込武氏「台湾・沖縄から『大国』主義を問う」はもともと府連のアイデアであり、府連は主催団体になりました。展示では中国人戦争被害者の要求を支える京都の会と共同で重慶大爆撃のパネルと西田千津さんらが重慶を訪れ、市民と交流する模様を収めた写真を展示し、現地で大爆撃の被害を訴える重慶の市民運動の皆さんからも感謝のメールが届きました。また文化企画ではドキュメンタリー映画「私たちの青春・台湾」（傅楡監督・2017年）を上映し、三須祐介氏が台湾民主化のプロセスや映画の特徴を解説しました。「支える京都の会」はこの春に群馬県知事が県立公園・群馬の森に設置していた朝鮮人追悼碑を強制的に撤去した事件を取り上げて、日本のアジア侵略戦争を記念する碑を敵視し、撤去させようとする右翼団体の策動に対してたたかった経過を下山順弁護士に語ってもらいました。この他に「平和友の会」など他団体にも参加している府連会員が当該団体の企画の成功のために奔走している姿も多くみられました。

戦争展に踵を接して行われた第二二回「東アジア青少年歴史体験キャンプ」にも、大八木賢治さんをはじめ多くの会員が準備段階から参加し、キャンプ成功のために尽力しました。

戦争展と歴史体験キャンプを盛り上げるために活動したすべての会員の皆さん、ご苦労様でした。

また、戦争展をつうじて三人の市民が日中友好協会に入会しました。これからも戦争展参加者との対話を維持しながら入会を呼びかけることが大切です。

（斎藤 敏康）

第四四回「平和のための京都の戦争展」映画『私たちの青春、台湾』平和を求めて

日中友好協会京都府連合会は八月三日(土)午前、本年度の「戦争展」企画として、ドキュメンタリー映画『私たちの青春、台湾』（傅楡監督／2017年）の解説講演付き上映会を実施しました。解説講演の講師は、立命館大学文学部教授の三須祐介さんにお願いしました。――京都府連がこの映画の上演会を企画した意図は、昨今の日本では「台湾有事」が不可避であるかのような言説が喧伝され、それを口実とした大軍拡が進められているにもかかわらず、日本人は、台湾問題の歴史的経緯や現在を生きる台湾市民の意識や動向を、あまりにも知らずにいるのではないか、という問題意識にありました。このドキュメンタリー映画は、後に「ひまわり学生運動」（2014年）に結実していく、様々な社会運動に積極的に加わっていく台湾青年たちの日常感覚や行動を、成功体験のみならず挫折をもリアルに浮き彫りにしており、現在の台湾の一面を理解し、いわゆる台湾問題の平和的な解決に向けて連帯を広げていくために必要な思考の材料を提供できたと言えるでしょう。なお、当日の参加者は三十二名に留まりましたが、「台湾問題の背景がよく理解できた」「台湾の学生たちと対話を進めていきたい」といった声も寄せられました。

（宇野木 洋）

平和友の会・第四四回平和のための京都の戦争展文化企画報告

今年の企画として、講演会「食と戦争―ウクライナとパレスチナをつなぐもの―」（講師：藤原辰史さん（歴史研究者・京都大学准教授）を開催しました。今年は会場決定に難儀して、広報が遅れたことが心配の種でしたが、関係者のご協力により立命館大学内の会場をお借りして160名を超える市民・学生にご参加いただくことができました。

講演では、地球を覆う8億人の飢餓という事実、世界の現代史を動かした事件の背景には常に飢餓があったという事実が紹介されました。第二次世界大戦中はナチス・ドイツによる600万人のヨーロッパ・ユダヤ人の虐殺の背後に、3000万人のロシア住民を餓死させるという計画があり、実際の多くのロシア人捕虜をはじめとして500～700万人のロシア人が犠牲になったという事実は衝撃的でした。そして現在のウクライナ戦争においては、ウクライナの小麦が投資対象となり、アフリカを中心に深刻な飢餓が進行していること、2014年～2018年にかけてはイス

ラエルによるガザへの枯葉剤攻撃により現在の熱い戦争の前にガザに深刻な飢餓が進行していたことが紹介されました。

飢餓による殺戮には「良心の呵責」がなく、大きなダメージを与えている現在、平和のための行動として「武器としての飢餓」に終止符を打たなければならない、終止符を打つための方法は私たち一人ひとりがしっかり考えて行動しなければならないという藤原先生のメッセージは多くの参加者の心に残りました。

日中戦争の時期にも多くの中国人が飢餓により命を失っています。大躍進という政策の下でも2000万人～3500万人もの犠牲者がでました。改めて「食と平和」の課題を日中友好協会も考えて行きたいと感じました。

（清水 郁子：平和友の会事務局長）

東アジア青少年歴史体験キャンプに参加して

八月四日から八日まで東アジア青少年歴史体験キャンプに通訳として参加しました。このキャンプは二〇〇二年、韓国で第一回が開催され、第四回からは中国も参加し、その後三か国持ち周りで開催されてきました。日中韓の中高生が、歴史問題や現在の問題について学び、議論交流をします。コロナの影響で数年間中止になり、昨年はオンラインで開催され、今年は久しぶりに対面での開催となりました。第二一回目の今年のテーマは「人類の危機に向き合い、平和な世界を創造しよう～現在と過去との対話を京都で～」でした。

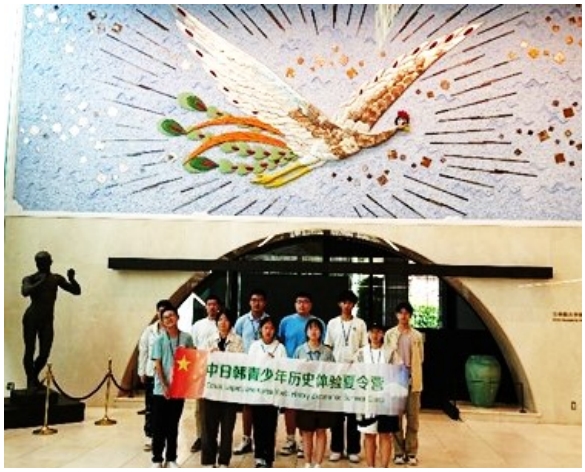
【1日目】

一三時からスタッフの打ち合わせがありました。一四時三〇分から日本参加者の結団式がありました。日本の生徒は約四〇名の参加です。日本の高校生男子は「緊張する」と言っていました。夕方になって韓国、中国の生徒たちが会場にやってきました。中国の生徒参加者は一一名、韓国は約四〇名でした。五日間、八グループに分かれて活動をします。日韓は各グループに五名、中国は一から二名なので中国人生徒は発言しにくい状態が続きました。日韓の生徒は中国人生徒の意見を聞きたがっていました。

一七時から開会式があり、その後夕食を取りました。夕食後はグループ内で自己紹介をしたり、グループ対抗でアルファベット順に一列に並ぶというゲームをし、少し打ち解けました。

【2日目】

朝食後、地下鉄とバスを乗り継いで、立命館大学国際平和ミュージアムの参観をしました。実際に戦争で使用された物を見て衝撃を受ける生徒もいました。



中国人の男子生徒の中には、あまり見ずに、すっと行ってしまう生徒もいました。中国の先生方は熱心に質問していました。以前にも中国人学生に同様の質問をされたことがありましたが、「日本にアメリカの基地があることを日本人はどう思っているのか」という質問でした。私は「戦後、アメリカが進駐しそのままの状態が続いてしまった。首都の東京にまで基地がある。他国ではありえない。予算も日本が多くを持っている。沖縄県民の多くは米軍基地撤退を望んでいる。鳩山首相の時、沖縄米軍を他府県に移す話が出たが、実現できなかった。米軍をすぐになくすのは難しい」と答えました。

展示の中に九〇年前後に韓国、台湾などアジアで民主化運動が広がったというコーナーがありました。その中に天安門事件について少し触れられていました。中国の先生はその前に立ち、生徒たちに立ち止まらせないように誘導していたのが印象に残りました。

見学後は、日中韓の歴史の先生が、各国の生徒に授業をしました。

[日本の先生の授業]

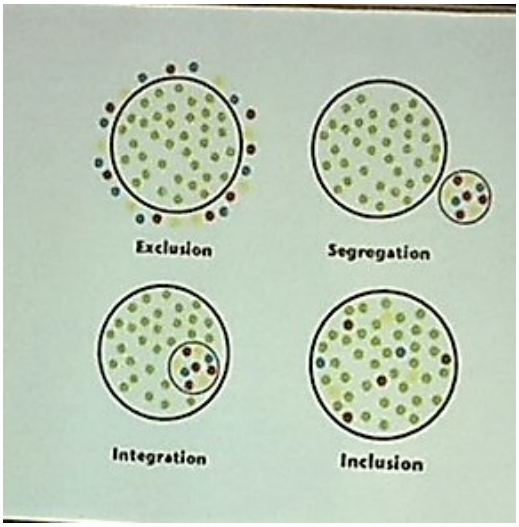
ある残留孤児の話。父親は戦争に行き、母親は爆撃で死亡。妹は栄養失調で死亡。戦後、育てられた中国人の家で虐待を受け、他の裕福な家庭に移り、裁判で日本名を勝ち取り、やがて帰国。「彼女は加害者か、被害者か」と言う問いについて考えるという内容でした。生徒からは、見方によっては加害者とも言えるし、被害者とも言えるという意見が出ていました。

[韓国の先生の授業]

ジャージャー面とパチンコの話から始まりました。先生は中国語も少しできました。中国由来のジャージャー面は韓国で人気があるが、今や韓国式ジャージャー面となっています。解放前まで数十万人いた在韓華僑が一九五〇年に起こった朝鮮戦争で数万人に減少しました。しかし、中華料理店は右上がりで増え続けました。なぜかという問いに生徒からは「おいしかったから」などの答えが出ました。韓国で永住権を持ち、市民権を得て生きていくには中華料理店を営むのが手っ取り早かったからだという説明がありました。

パチンコ屋は在日朝鮮人が経営していることが多いようです。在日朝鮮人、在日韓国人、在日コリアなどの言い方があります。日本生まれの在日朝鮮人が、北朝鮮代表としてオリンピックに参加したことがあります。在日韓国人なのに日の丸をまとい、日本代表としてオリンピックに参加した例も出し「国籍とは何か」と生徒たちに問いました。生徒たちも難しい問いに一生懸命考えていました。先生は最後に次の図を使用し、四つの状態の説明をしました。

exclusion 排除　segregation 分離
integration　統合　inclusion　共生



私はなるほどと思って聞いていましたが、中国、韓国の学生からinclusionは少数が多数に飲み込まれて行っているだけではないかという指摘があり、驚愕しました。私たち大人が気付かないことを指摘したからです。こういった意見が出るのも三か国交流の良さです。

[中国の先生の授業]

「元脱走兵」医師、山崎宏氏の話。山崎氏は一九〇八年に岡山で生まれ、一九三七年に日中戦争が勃発すると中国大陸に軍馬の獣医として従軍しました。しかし、日本軍が幼い子どもを絞め殺したのにショックを受け三八年には軍隊から脱走し、中国人に助けられます。終戦後に中国で診療所を開設し、六〇年以上に渡って奉仕活動として現地市民への無料診

療を行いました。日本に帰ることもできたのですが、それを断り、中国に留まり人生を終えました。

八路軍の教育を受けるようになった理由は以下の三つだと解説していました。①八路軍が自分たちに食料をくれた。②自分たちに安全な生活を保障した。③やがて日本が戦争に負けるということがわかってきた。負ければ日本は民主的な国に変わる。そのためにも先んじて世界情勢を学ばなければならないと考えた。

翌日、この先生に赤旗（八月七日）を見せました。広島原爆の記事が多数ありました。「赤旗は見たことがあるか」と聞くと「知っているが、初めて見た」と答えました。「もし、いらないならホテルで捨ててくれたらいい」と手渡しました。「ありがとう」と受け取り、隠すこともなく熱心に読んでいました。

午後からは、展示と授業の感想を交流し、ホテルに戻りました。ホテルに到着し夕食を取った後は、またグループごとに集まりました。最終日には、グループごとに何か出し物をしないといけません。その話し合いをしました。（つづく）　（石田）

城陽「平和のつどい」「歌とお話しで平和を考える」企画で「悪魔の飽食」を歌ってきました。

初めての投稿です。日中友好新聞の「万人坑と強制労働現場を訪ねる」の連載を読んで、三年ほど前に入会しました下京区在住の森野と申します。

私は今、あくまで平和な合唱団に参加しています。例年、夏には平和ミュージアムで行われる戦争展で「悪魔の飽食」を歌ってきましたが、リニューアルされたミュージアムでは演奏が出来なくなりました。

今夏、城陽での「平和のつどい」で「歌とお話しで平和を考える」企画をつくって下さり、合唱団員の中須賀ツギ子さんのお話と、悪魔の飽食 第一章・三章・六章・七章の四曲を歌わせて頂きました。演奏の場を提供して頂いた城陽の「平和のつどい」を企画された方々に感謝申し上げます。

ご存じの方も多いと思いますが、合唱組曲「悪魔の飽食」は、第二次大戦中、旧満州で細菌戦を展開するため、約3000人に生体実験を行った関東軍731部隊を告発した森村誠一氏の著書「悪魔の飽食」を元に森村氏が原詩を書き、池辺晋一郎氏が作曲した七章からなる作品です。初演は一九八四年ですが、一九九〇年「日中友好協会創立四〇周年コンサート」が東京で開催され、この演奏をきっかけに「悪魔の飽食」全国縦断コンサートが始まりました。

一九九六年に、日中友好協会京都府連の粟田栄さんの呼びかけで、第三回全国縦断コンサートが京都コンサートホールで行われました。成功裏に終わった京都でのコンサートの後、京都あくまで平和な合唱団結成に導いたのも粟田さんでした。

全国縦断コンサートは、その後も各府県をまわり、二〇一九年、第二九回新潟公演のあとコロナで途切れてしまい、復活が待たれています。

京都あくまで平和な合唱団は、日本の侵略戦争での犠牲者の鎮魂と贖罪、そして再び戦争をしてはならないという不戦の誓い、平和の願いを込めて二八年間歌い続けてきました。

地球上から戦争の火が消え、この曲を歌う必要がなくなる日まで歌い継いで行こうと思っています。

二〇二四年八月二〇日

あくまで平和な合唱団員　森野 修一

北京・河南省旅　10/19(土)～10/22(火)

・簡単にとれる団体ビザで、中国へ行きませんか！
・2日目、北京では、民間の友好団体との交流と観光、希望者は自由行動もOK。宿泊は中心部のホテル（北京亮馬河大廈＝ランドマークタワーホテルの予定）で、ゆっくりくつろぎ、おいしい北京料理を楽しみます。
・3日目は、河南省へ移動し、日中戦争の時、大江山に連行された孟さん(97歳)と遺族を訪問し、交流します。日中友好の生涯忘れられない思い出を作りましょう。みなさまのご参加をお待ちしております。
・旅行費用：165,000円（往復航空券及び現地費用）。そのほかビザ申請料金13,500円と燃油サーチャージ・空港税（＝為替レートで変動）が必要。
JU観光（取扱旅行社）　申込締切は9月6日です。
主催：「中国人戦争被害者の要求を支える京都の会」
お申込は chizunis@yahoo.co.jp　（担当：西田）

西双版納の旅
――「倭人」のルーツを求めて（その二）

基諾族（キノ）の村にて

張　莉

朝は心地よい鳥の鳴き声で目覚めました。ホテルの近くに学校があり、その正門の隣に包子を蒸し器で蒸しながら売っている店があり、そこで包子を買ってきて朝ご飯にします。暖かくて、包子の食感がもちもちしていて中には野菜や肉を味付けしたようなさまざまな餡が入っているので大変美味しいです。包子ひとつが5角（当時7円ぐらい）で大変安く、朝昼晩三食これを食べていても何の不満も感じず生きていけそうです。

「村の入口の女神像」（筆者撮影）

タクシーを一日借り切る交渉をして、基諾族の村に向かいました。この村は、観光地化されており村に入るには50元（当時、約700円）の入場料を払います。中に入ると、まず目に入ったものは土を盛上げて作った女神像です。左右の草の生えた小山が乳房を表しています。そういえば、景洪市内をタクシーで走っている時に太陽を背にした女性の土焼きの茶色い像が道の所々に飾られてありました。昔に、この地には天照大御神のような女神がいたのかもしれないと想像を掻き立てられます。また、古い時代にはこの地は女系であったのかもしれません。

中国から伝わった古層文化が垣間見られるタイ国では、女性が働き男性が遊んで暮らすという夫婦の生活パターンが今でもいたるところで見られるそうです。

「鬼の目」（筆者撮影）

村に入ると、高床式の建物が見えます。中国語では「干栏(ガンラン)（干欄）」と呼ばれています。高床式の建物は古代に日本に伝わったことは周知の事実です。中国では哈(ハ)尼(ニ)族などの高床式建物に住む部族が雲南地方から揚子江の上流から、また中国の東側の沿岸に沿って波状的に移動し、朝鮮半島の南の海側に移動し、やがては日本にやって来たと言われています。

日本の神社にある社(やしろ)は今なお高床式建物の名残を留めています。基諾族の家の外には、壁に「鬼の目」が掛かっています。「鬼の目」は竹で六角形や八角形に編んだもので、邪気払いとして家の収納庫などに貼り付けるものです。日本でも、奈良の都祁村に「鬼の目」を貼り付ける伝統が戦前まで残っていました。又、家の中の柱には「家神柱」「神女柱」「生命柱」「寨神柱」など、各々に名前がつけられています。家を支える柱には神が宿るとされ、その意味の拡張により柱そのものが神であるという民俗的な観念もあったようです。

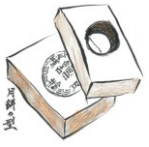
柱を「神」としてみなす観念は日本でも色濃く残っています。たとえば、神様や神像を数えるのに一柱・二柱と数えます。『日本書紀』には伊弉冉(いざなみ)の神と伊弉諾(いざなぎ)の神が二柱の神として表現されており、この二柱の神が淡路島・本州・四国などの国生みをしました。「柱」の字の右側は「主」で、「主」には一家の「あるじ」の意味があり、「柱」は家を支える「あるじ」の意味でしょう。伊勢神宮や出雲大社など本殿の中央を支える柱は心(しんの)御柱(みはしら)と呼ばれ、神様が宿るとされています。日本の家などの建物においても中央に最初に立てる柱は大黒柱と呼ばれ、神様が宿っていると信じられてきました。大黒柱は、家の中心に立てる柱で家の中で最も太い柱でもある。大極柱ともいう。また、集団の要となる人文物を大黒柱と言います。

（ちょう　り・大阪教育大学教授）

京都府連イベント

・9/23（月・休）日中不再戦碑前集会
　11:00～12:00
花の家で懇親会

・9/29（日）午後1:30～右京お茶会
「小さき麦の花」鑑賞＆交流　右京ふれあい文化会館(JR花園駅すぐ)
会場カンパ　500円



≪中国伝統劇つれづれ≫ 第十六回

「五年ぶりの上海と本業（前編）」

藤野 真子

最後に上海へ旅したのは二〇一九年夏のことだった。状況的にやむをえないとはいえ、今夏の訪滬まで五年も間が空いてしまった。

さて、今回の最大の懸案は電子マネーで、スマホにアプリを仕込み、中国人の同僚に使い方をレクチャーしてもらったものの、実際に大丈夫なのかどうかは、現地に行ってみなければ分からない。幸いちゃんと設定できていたようで、現地の空港に降りてすぐリニアのチケット購入に成功、いっぺんに肩の力が抜けた。

今回の滞在は移動日を除き実質三日間。うち、一九九五年の留学以来の「老地方」・上海図書館近代文献閲覧室へ籠もるのが二日間。毎年一、二回の頻度で通っていた頃でさえ、入館手続きや資料のコピー方法といったルールがコロコロ変わっていたのだから、五年も空けば、最悪の場合入れないかもしれないと不安だった。しかしそれは杞憂で、入館カードの更新のみで、無事、目的の劇本や新聞雑誌等の資料（コロナ禍前からすべて画像ファイル化され館内PC上のみ閲覧可能）を見ることができた。必要な資料名と枚数を申請表に書き込み、プリントアウトして持ち帰るシステムも五年前と同じだったが、枚数が少なければディスプレイを撮影すればいい、無料だからと館員に言われたのは意外だった。昔、マイクロフィルムの閲覧画面が撮影可だった時期があったが、この時は有料だった。筆者も経験があるが、プリントアウトでは文字が潰れてしまうとの苦情でもあったのだろうか。

民国期越劇の劇本

近代文献閲覧室は窓が大きくて全体に明るく、光量を調節するという点で撮影は多少難しい。記事の題をノートにメモしてから画面を撮影し、その後、撮影範囲やピント・明暗に問題がないか確認するのも面倒だと言えば面倒である。とはいえ、上海でいちばん長い時間を過ごしたのがこの閲覧室であることは間違いない。海を越えてここまで出向き、「当たり」の資料に出逢った時の高揚感は、実に得がたいものである。何より、この部屋に入室したときに覚える実家に帰ったような安堵感は、五年の時を隔てても変わらなかった。

今回は越劇研究の科研費での出張でもあったが、折良く、館内一階のフロアで民国期越劇資料の特別展示が行われていた。PCの画面越しに見ていた資料の現物が目の前にある。あの劇本はこんなに小さいのか……といった、ふとした気づきもある。（後編に続く）

（ふじの なおこ・関西学院大学教授）

永続会員表彰おめでとうございます

永続会員表彰を受けられた駒木泉さんからのお便りを紹介します（編集部）

前略

日頃、協会の為にご尽力されている事務局の皆様にまずはお礼申し上げます。

さて過日「友好新聞」紙上で永続会員表彰者の中に自身の氏名を見い出し当惑していたところ、ほどなく表彰状が送られて参りました。

日中友好協会とは三十年前、数年間ほど中国語教室の講師を担当させていただいた時が、ご縁のはじまりです。

住まいが京都市内でないこと、仕事・介護におわれたこと等、両々相俟って、ほとんど活動らしい活動もしておらず、在籍年数が長いというだけで表彰とは面映い限りです。

私自身は中国で生まれ、中国を第二の故郷と思うものですから、中国とは常に良好な関係を持続して欲しいと願っています。しかしながら昨今の習政権下の中国には与したくない。さりとて敵対は言語道断です。今こそ当協会の役割が強く望まれます。

一層のご活躍を期待し、私も陰ながら微力を尽したいと存じます。

異常ともいえる暑さが続いております。どうぞ皆様ご自愛下さい。

とりいそぎお礼とご報告まで

七月二十七日　駒木　泉

コロナ禍の台湾研究活動道中記（第29回）

感染爆発（その2）

高橋　孝治

前回、台湾で外国人の入境が認められて約一か月経過したあたりで台湾で新型コロナウイルス感染症の感染爆発が始まり、二〇二二年五月一日からすべての会社はリモートワークに、すべての学校はリモート授業にするようにせよという台湾当局の発表があったと述べました。

このため、筆者も研究目的で台湾に来たにもかかわらず、各大学への訪問もできなくなりました。各大学へも連絡しましたが、リモート授業へ完全移行して大学も閉鎖されているので、今は来ないでほしいという返信ばかりが返ってきました。

この時期、筆者は何をしていたのかあまり記憶がありません。各大学は閉鎖されていても、台北の国家図書館や国立台湾図書館などは開館していたので、毎日資料収集ばかりをしていたような気がします。このように、台湾での研究活動としてやることは多くあるものの、人と会って議論するなどのことができない以上、やはりなぜ台湾に来たのかよく分からないことはやはり否定できません。

こうして、台湾に来て、下宿にこもって台湾の大学とリモート研究会などに参加して研究発表したり（なんでわざわざ現地まで来てリモート研究会に参加しているんだろう）、図書館に行ったりしながら、時間は二〇二二年六月になっていきました。（続く）

（2022年台湾フェローシップ採択者・（元）台湾・淡江大学　日本政経研究所　訪問研究員（2022年）／「高橋孝治　中国」でウェブを検索！）

2022年6月8日に参加した台湾・国家図書館で開催の過去の台湾フェローシップ採択者による研究発表会

书呆子　（中国語で「本の虫」という意味）

「三体」Ⅲ上・下　劉　慈欣（りゅう・じきん、リュウ・ツーシン）著、大森望、光吉さくら、ワン・チャイ、泊　功訳、ハヤカワ文庫、２０２４年６月２５日刊、６０３ｐ、６２１ｐ、邦訳書リスト２ｐ。「三体」Ⅲ上・下劉　慈欣著、ハヤカワ文庫、（２）

訳者あとがき（６０４ｐ大森望より）；１９６７年の中国で幕を開けた物語が、まさかこんなところまで辿り着くとは。……SFならではのセンス・オブ・ワンダー（驚きの感覚）が満ち満ちている。……「三体」Ⅲ「死神永生」が……西暦１４５３年５月のコンスタンティノープル陥落から始まるというのも“SFの魔法”の一つ。……主人公たちが人工冬眠でばんばん時代を飛ばしていくことも手伝って、人類文明の一いや宇宙全体の一歴史を早送りで見せられているようなスピード感がある。……（６０８ｐ）「出版社と私の到達した結論は、第三巻が市場で成功することは有り得ないので、……ハードコアのSFファンと自任する自分自身にとって心地よい”純粋な“SF小説を書くことにした。……第三巻は、高次元宇宙と二次元宇宙、ブラックホールとポケット宇宙が詰め込まれ、時間線宇宙の熱死まで伸びていた。……心底驚いたことに、シリーズ全体の人気につながったのは、このSFファンだけに向けて書かれた第三巻だったのである。」と著者の言葉が紹介されています。……（６０３ｐ）全体の九割は、２１世紀初頭から２４世紀末までの四世紀弱におさまっている。……（６１８ｐ）２０２２年７月、「三体」と同じ翻訳チームにより「三体Ｘ　観想之宙」が単行本として邦訳刊行されている。（６１９ｐ）「三体」三部作に繋がる短編群の邦訳は、「円」、「流浪地球」、「老紳介護」の短編集にまとめられている。まだ訳されていない十数篇についても、短編集を出す計画が進んでいる。……。

最後に、やや意外であったのは、（あとがき６１２ｐ）にある“茶室に招いて茶をふるまう”場面が有ったことです。「三体」Ⅲの上に出てきます。ページ数は、２６６、２６７、２６８と、５２６と、５３８と、５５６、５５７です。

付言：「三体」を、国内外の学者・研究者が、どう受け止めたのか？知的格闘の歴史をたどる著作「宇宙の超難問　三体問題」を次回で紹介したいと思います。

（中本　学）